



きじむんの どう〜ちゅいむにい〜 第11回
琉球版 ト〇とジ〇ー

キーワード：猫 鼠

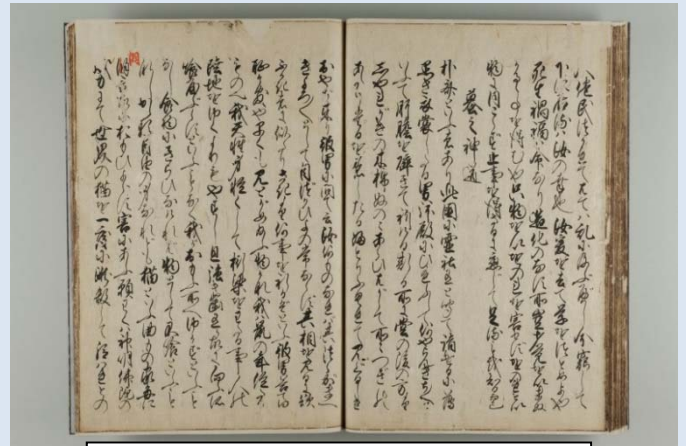
はいさーい & はいたーい！ きじむんやいびーん。

琉球大学およびハワイ大学の猫好きの皆さん！ お待たせ(?)しました！ 2月22日は「にゃん・にゃん・にゃん」で日本では「猫の日」です！ と、いうことで、便乗した感満載の今月は、猫好きの、猫好きによる、猫好きのための「どう〜ちゅいむにい〜」ってみますよ〜！

猫と鼠の相容れない関係・・・

宮良殿内文庫 No.7『万書付集』に「墓之神道(ひきのしんどう)」という話がおさめられています。これは、江戸時代の滑稽本である『田舎荘子』の写しにあたります。このお話で、人間の男の姿になった年老いた鼠がとある神社で「猫をこの世から無くしてくれ。猫は人の食事から魚を盗んだり、猫又になったりと災いばかりで益がないではないか。」と頼み込みます。そこを、通りがかりの親父の姿をしたヒキガエルが「猫は無益の者だが、そもそもおまえ達鼠を取るがために、人々は少々の盗み食いを許しても猫を飼っているのであって、出来ないことを神に祈るよりは心を改めて人家に害をなすことをやめれば、この世に猫を飼う者はいなくなるはずだ。」と諭しています。このお話は、自分の事は棚にあげて他人をとがめ、力がかなわない時には神仏に頼むという人間の愚かさを猫と鼠になぞらえて説いたものです。

まあ、某アニメのように「仲良く喧嘩しな」という訳にはいかないのが猫と鼠の関係のようです。



宮良殿内文庫 No.7 「万書付集」より

猫と鼠の終わりなき戦い：近世琉球編

中国から琉球へ派遣された冊封使の記録である『使琉球録』の中で、琉球では犬を飼う人はおらず、「異色(かわった色)の猫」を好んで養っているという記述があります。また、イギリス人宣教師ベッテルハイムが琉球に滞在中、欲しいと願い出ている日用品のリストの中に「猫三匹」の記述があり、琉球において猫は生活に必要な動物だったようです。

幕末の奄美の民俗を描いた資料である、名越左源太の『南島雑話』に「猫は犬と違って大変丁寧に扱われる。理由はハブという毒蛇が鼠を取りに屋内に入り、人間を害するからである。鼠が少なければハブが屋内に入ってくることはない。そのために猫を飼って鼠を取り除くのである。」とあ



学内の猫(執筆担当撮影)

り、猫は、鼠を取り除き、ハブの被害を避ける為に飼っていたということになります。

近世期における、猫と鼠の戦いにはハブが一枚噛んでいた！ おあとがよろしいようで。(CT)



参考文献：小島環禮著『猫の王 = The king of cats: 猫はなぜ突然姿を消すのか』(小学館, 1999年)、名越左源太[著] 国分直一・恵良宏校注『南島雑話』(平凡社、東洋文庫431、1984年)、『琉球王国評定所文書』(琉球王国評定所文書編集委員会編、浦添市教育委員会1988-2003年)、夏子陽[著]; 原田禹雄訳注『使琉球録』(榕樹書林、2001年)、蕭崇業 謝杰[著]; 原田禹雄、三浦國雄訳注『使琉球録』(榕樹書林、2011年)

琉球大学附属図書館 沖縄資料担当 平成28年2月1日発行